

第 53 回 大 会 の 報 告

1986年9月20日(土), 21日(日)の両日, 明治学院大学横浜校舎において第53回大会が開催された。特別講演の演者, 作家なだいなだ氏より「日本人の自我」の講演要旨が大会準備委員会を經由して事務局に届けられた。貴重な原稿と思われたので, 機関誌にその全文を掲載することとした。なお, 同時に開催された2つのシンポジウムの司会者からもレジュメが寄せられたので併せて報告することにする。

特 別 講 演

日 本 人 の 自 我

な だ い な だ

私は, 医師であり, またもの書きでもあります, どちらの仕事をしていくうえでも「自我」や意識の中の「日本人」の問題と関わりを持たねばなりません。

私はながくアルコール中毒の専門医として働いてきました。

世間では, 専門医というのは裁断する役割を持った人間のように思われているようです。例えば, ある人間がアルコール中毒かが問題になる。夫は自分はそのではない, と言い張る。しかし。妻は, いや, 「絶対にアル中よ」と決めつける。2人の間では, 決着がつかない。そこで, 専門家に決着をつけてもらいましょう, ということになります。しかし, 実際はどちらかを正しいとする形で裁断をしてはいけません。むしろ, そこで起こっている二人の間の葛藤を解決することを考えねばなりません。医者には, 裁判官になる必要はないのです。さいわい, そのことには早く気が付きました。

私が, アルコール中毒の専門医として仕事を始めたのは33歳のときでした。それまで, アルコールの研究など, 特別にはしておらず, 若造でした。まったく看板だけの専門医です。

その私が, 看板を掲げて間もなくの頃, 一人の患者が来ました。彼は, 自分は東大の教授に診て貰ったが治らなかった。5つの有名病院の院長や医長(みんなぼくより偉い先生たちばかりです)に診てもらったが, 治らなかった, と述べ立てて, そのあげく, ここにきたら, それが治るか, とこちらの表情を窺うのです。

私はウンザリしました。そこで, そんなに立派な先生に診てもらって治らなかったものが, 若造の青二歳のぼ

くに治せると思うかと, 言ってやりました。

ところが, この患者は自分で入院したいといい, 3か月の入院生活を送り, 以後ずっと断酒を続けました。おどろくばかりの変化です。私にも, その過程がよく分かりません。そこで, 彼に聞いてみました。

「ここに来て, なにがどうよくなったのかね」

彼はニヤニヤしながら答えました。

「偉い先生に診て貰っていたときは, 先生のいうことを守っていればいい, という気持ちでしたが, ここに来て, この先生が主治医なら, 自分がしっかりしなくては駄目だ, という気持ちになったのです。それがよかったのでしょうか」

もちろん彼は, 当時の私より, 10歳以上も年上でした。彼の自我の未熟な依存性が, 感じられました。

こうして, 私は彼らの抱えている自我の問題に意識するようになったのです。

医者が治してやろうとしても, よくなりません。自分がよくしようと努力しなければ, 効果は上がらないのです。普通の医者と患者の間では考えられない関係です。それ故, 偉い権威のある先生よりも, 私のようなちよつと頼りない感じの医者の方が, 結果的には治療に成功することが出来たのです。

こうして, 出発した私が, 患者たちに自主的なグループ「断酒会」への参加を積極的にすすめたことは当然です。

しかし, この断酒の会への関わり方でも, 自我の問題が顔を出します。患者たちの多くは, この会に入ることには抵抗します。また, 入っても, かなりの数が, 脱落し

ていってしまいます。そして、その原因が、彼らを中毒に導いた要素の一つである、未熟な自我なものでした。

まず、入会することへの抵抗の方ですが、患者たちは、他の患者の話を聞きながら、自分との違いにだけ注目してしまいます。そして、彼はアル中である。だから、こういう会に入る必要があるだろう。しかし、自分はあそこまでいっていないから、その必要がない、という形で、会に入ることも他人の経験を自分のために生かすことも、出来ないのです。彼らは自分の依存的な点を十分に意識していますが、依存すまいとして、過敏になるあまり皮肉にも、逆に他者を遠ざけ過ぎてしまうのです。こうした人たちに、他のものと自分とが、どこまで違っていて、どこまで同じであるか、という比較的な視点でものを見るようにさせ、違いのみを見ないように指導することは、必要なことです。

また脱落する方ですが、これらの人たちには、入会時には問題が起こりません。むしろ、はじめのうちは、いい話を聞いた、参考になったと、会に入ったことを感激していますが、そのうちに、例会で他人の話を聞いても、これは一度聞いた話、この話もう聞いたことがある、と、新鮮さを感じなくなります。まるで、二番煎じのお茶みたいです。例会に出ることに利益が感じられず、無駄なような感じがして、足が遠のいて行きます。

こうした人たちは、依存的で、会に入るのは問題ではありませんが、他者を自分に何かを与えるものという視点でしか、捕らえられないのです。だから、他人が自分に役に立つものをもたらしてくれなくなると、自分は「断酒会を卒業した」というようになり、出席しなくなります。その人たちが、会で活動が続けられるのは、「自分は、他人に何をしてやれるか」という視点でものが見えるようになった時からです。

こういう自我の要素を考慮しないで指導しても、なかなかうまくいきません。

このように、抽象的に自我論を展開するのは別に、アルコール中毒の治療には、実際の面で自我の問題に触れる必要があるのです。

さて、「日本人」の意識の問題ですが、いま、ある政治家の「日本は単一民族だからうまくやってこられた」云々の発言が問題になっています。日本には、アイヌ民族、在日朝鮮人などの少数民族も社会の構成員としていますが、この発言は、間接的に彼らが多くなれば、

うまくやっていけない、といっているようにも受け取られ、彼らにとって非常に不愉快な発言です。自我の完成を目指す視点からは、他者と調和を図れるほど成熟していない、未熟な自我を持った人間の発言です。ただ、それでもうまくやってこれるのは、不快を感じるのが少数であるだけの理由からです。こうして、多数派の自我の未熟さは政治問題になり、その反対に少数の側にこのような未熟な自我があれば、おそらく社会への不調和から、不適合を起こし、精神科に連れてこられるようなことになっていたでしょう。

そもそも、日本に住む人間は「日本人」意識を持たずに、長い間生きてきました。ところが、最近になって突然に、「日本人論」が沢山出版されるようになりました。それは、私の考えでは、現代の日本社会に住む人間たちのアイデンティティ不安から来ています。急速な西欧化のために、自分を見失い、一体自分は何なんだろう、と自分が分からなくなっている人が、多い。自我が表面的に過敏になっています。そのために、これが日本人の特性だといわれると空き家の貝を見つけた宿借りのように、それを身につけて安心しようとするのです。

安易な日本論の中に、日本人社会は縦、西欧は横、という非常におおまかな議論があり、また、こうした大まかな議論こそ分かりやすいゆえに大衆を捕らえていくのですが、江戸或はそれ以前の日本と近代とを結び付けるような日本的なアイデンティティを見つけることは、さしたる意味をもっていません。変転きわまりない世界に強迫的に確固たるものを求めないではいられない、大衆の過敏な自我の状態を示すものであり、この大衆の過敏な自我は、かつては尊皇攘夷のテロリズムにあらわれた狂いと、全世界大戦の時の、日本の狂信的軍国主義とに結び付くものです。しかし、この問題は、精神医学的な問題であるにもかかわらず、現実には政治的問題としてしか取り上げられません。

その点、私たち精神科医はもう少し、政治的な視野を持つことが必要です。

文学もまた、こうして、近代は自我を主要なテーマとして取り上げてきたのでした。こうして、自我を対象にした文学も必然的に政治と関わり合うことは避けられません。それが現代の状況だということが出来るでしょう。

シンポジウム A

「コンピュータと生活の変貌」を終えて

越 河 六 郎

(労働科学研究所)

本シンポジウムは、明治学院大学大島貞夫教授の企画によるものである。

いまや、まさにコンピュータの時代である。人間生活への影響もいちじるしく、その効果の大きさに驚き、疑念を抱くことすらあった。しかし、いぶかしがる段階はすでに過ぎていたのであって、人間がこの技術社会にどう対処していくべきかが問われているとみななければならない。

技術は、もともと人間が作ったものであるから、作られた後になって「対処」を考えるというもおかしな話であるが、技術の進展の急な傾斜が、それらの進む方向を見定めるのに手間どっていることもうなづける。

今回のシンポジウム「コンピュータと生活の変貌」は、そういった意味で時宜を得た企画であった。各討論者の論点を紹介しておく。

「コンピュータと教育」(読売新聞社科学部、雨宮正彦氏)

教育にコンピュータを活用する意味は、コンピュータという、人類が初めて手にした知的機械の性格に係っている。コンピュータは全く新しいメディアといえる。単に、情報を伝えるものとしてではなく、思考を育て、深める道具(媒介物)という意味である。コンピュータを活用することで、教育環境の変革も可能であると、積極的側面が強調されている。コンピュータは手足の延長線上の道具ではなく、思考の延長線上で使われる道具であるという見解は一つの視点として興味あるところである。高年者になると、コンピュータの使用に困難があるといわれるが、雨宮氏の考え方からすると、高年者の諸機能の低下をむしろ補う道具としてコンピュータを使う、そういう使い方を開発すべきであり、それが可能だということになる。

「コンピュータと組織変革」(富士通、三輪紀元氏)

「現在の企業の組織は、総務・営業・技術など、それぞれの機能により細分化されている。情報もそれぞれに蓄積されており、そこから権威が保たれる面がある。これが、コンピュータによって、オンライン化され、さらにネットワーク化されると、紙で各々保有されていた情

報が一元化されることになり、各組織を越えた形で利用できることになる。こうなると、固有情報を保持しているが故に他の組織に権威を保持しえた組織の存在基盤が失われる。」また、「A・Iの機能をもつコンピュータが登場してくれば、企業の組織変革に与える影響は大きい。部・課長の必要性すら議論しなければならなくなる。」コンピュータの進歩に伴う組織の変革は既に進行していることでもあるが、「コンピュータを単なる道具としてではなく、人間にとっての有効なパートナーとして、その能力をフルに発揮させる組織づくりが、これからの企業経営に必要となってくるであろう」と結んでいる。

「コンピュータと中高年」(日本鋼管病院、佐藤隆氏)

コンピュータ化の影響に関する観点が論旨となっている。「中高年にとっての影響であるが、ひとつは、高度に発達したコンピュータを組み込むことにより、人間の労働負荷が軽減され、身体的に快適な作業環境が設立され、ストレスの少ない仕事ができるようになる。有害環境からの解放と、安全、軽労働化への変容が可能である。」もうひとつは、この反対の側面であるが「単調な監視業務等から、かえって精神的ストレスの増大、複雑な重大責任を負わされる業務の増加などには中高年者の不適應も考えられる」という見方である。特に、メンタルヘルスに関連する事例報告も述べられた。

「コンピュータ犯罪とその問題点」(慶応義塾大学、宮沢浩一氏)

コンピュータ犯罪の定義など、心理学の領域ではなかなかきけない異色な知見が紹介された。アメリカの資料を中心とした、コンピュータ犯罪の実態、犯行形態などの統計に関する説明があった。「コンピュータ犯罪者の人間像」は心理学の上でも興味ある事項であり、対策として、「以上述べたような特徴をもつコンピュータ犯罪者を考慮して、予防措置を講ずべきであること、また、犯罪者の社会復帰のあり方の検討も必要である」と述べられた。コンピュータ犯罪の問題は、教育の問題でもある。

指定討論者の正田教授（立教大学）から、「コンピュータと生活の変貌といわれるが、在宅勤務の問題はどうなるか」、「情報を拡張する道具（コンピュータ）というときの、精神とは何か」、「コンピュータによる組織の変革の具体的な像は描けないか」、「コンピュータ化によって、どういう災害、事故が減少したのか」、「我々心理学

者にとって、コンピュータ犯罪者の人間像というものをもっと知りたい」といった質問、また意見が提示され、活発な質疑応答がなされた。フロアーからの意見も多く、シンポジウム企画のねらいが、かなり実現されたと思われる。更に回を重ねたいテーマである。

シンポジウム B

「いじめの解決と教育の在り方を考える」を終えて

山 崎 久 美 子

（明治学院大学学生相談室）

日本応用心理学会第53回大会は、9月20、21日の両日、神奈川県横浜市の明治学院大学横浜校舎で開催された。今学会は2つのシンポジウムが企画され、横浜市民公開講座としても開催された。そのうちの1つが「いじめの解決と教育の在り方を考える」というシンポジウムであった。明治学院大学の神保信一教授の司会のもとで、5人のシンポジストが各々の立場から意見を述べ、その後フロアーの諸氏との全体討論が活発に行われた。シンポジストは、神奈川県立子ども医療センター平田一成氏、横浜市教育委員会田中裕氏、神奈川県厚木児童相談所町田清氏、千代田区立神田小学校橋厚子氏、明治学院大学山崎久美子の5氏であった。学会員以外の横浜市民の方々にも御参加戴いて、盛会のうちに幕を閉じた。各演者の討論要旨を以下にまとめる。

今や流行語になった“いじめ”

まず、平田氏は当世風にいえば“いじめ”とは現代社会用語であると述べ、いじめを世間に流行させる拍車をかけてしまったのも私たち大人であると指摘する。そして、現代の大人社会のいじめのあり方を振り返ってみる必要性を説き、同時にそれを受け取る私たちの麻痺してしまった感覚を嘆く。家庭や職場での人間関係ではいじめの存在は特別珍しいことではないとし、大人の世界でもいじめは生活の中でかなり目立つ問題であると強調する。氏は、そこで、いじめられて不登校、家庭内暴力を呈したある小学校5年生の女の子について検討する。その結果、子どもが心の内側をみせられるような師弟の関係がほしいものであると語る。私たち大人は子どもに対する思いやりに欠けていることが案外あるといい、大人のエゴを鋭く突く。次に、子どもの暴力の背景には家庭での親たち家族たちの相克が必ずとわいてい程見出

されると指摘し、ある少年の激しい暴力が意味していることは、ただ暴君であることだけが混乱している自分の存在を確かめられる証しであったと分析する。また、同一性の獲得のための身近なモデルが不足しているとし、現代の教育のあり方にも反省を求める。子どもの教育の現場でもパターン化された画一的な中になく不安な状況が見出されるとし、それが人の心にひずみをつくるという。これからも子どもが同じパターンで問題を起こすとすれば大人が画一化した社会をつくってしまっていることに原因があると考察する。氏は、流行が去りつづるとみえても人をいじめる行為は人間が生きていく限り様々な形で存在し続けると結論する。

学校という場において行われている“いじめ”

田中氏は、学校教育に焦点をしばっていじめの問題を考える。横浜市における悉皆調査の結果からいじめの実態を浮き彫りにする。そして長期的な指導を展開する必要性を指摘するとともに、今現在困っている子どもたちに対する具体的な手立てとしてのいじめ110番の設置について、その反響を披露する。いじめられた子どもたちが一体どういう行動をしてきたかについて、じつと我慢したり、教師に話したが対応不十分であったという場合が実に多いことが特徴であったとし、これには、現在のいじめの問題に対する学校の対応、教師の意識の問題が相当影響してくるのではないかと分析する。一体いじめというものを学校の中でどういうふうに捉えているかというと、教師は実際の訴えをきいたときに、子どもにとってはその問題が今自分自身にとって最大の問題であるという認識が教師集団に非常に薄いということ、換言すれば、大人の判断を下してしまっていることで子どもが教師に対する信頼を失っていると述べる。それゆえ、

教師がどれだけ子どもたちの日常の生活の中で信頼を得られるか、または子どもとの接点をどのように求めているかということが大きな課題とされていると強調する。また、発見のしにくい現状、いじめと判断する難しさを指摘し、いじめは他人との関係のあり方の1つであるとし、すべてをいじめとみなして子どもの発達を阻害してはいけないという。そして、学校の指導方法の硬直化等を指摘した後、いじめ問題の解決には、教育そのものを見直し、教師が変わらなければならないと結論する。

子どもと共に歩もうという姿を重視する

町田氏は、児童相談所でのケースワーカーとしての体験を事例を含めて報告した。まず氏自身の児童期からあったいじめ—いじめられの問題を歴史的に展望して、昭和45年頃には遊べない子どもの問題といじめの問題がちらほらみえだしていたことを語る。次に、神奈川県はいじめ調査の結果を紹介し、児童相談所に来るいじめに絡んだ相談は非常に重い例が多いこと、そして、登校拒否児や教護児童や非行児童においていじめ—いじめられがその背景にある例が多いことを指摘する。氏は、そこで、中学校1年生の男子の事例を紹介する。小学校4年生のときからいじめられていた事例で、授業中の突飛な逸脱行動、不登校状態、果ては退行現象を呈し、精神障害をも疑われて来所した重篤なものであった。指導を重ねる中で、いじめられの事実の告白がなされ、さまざまな症状がいじめられから逃避するための退行の産物であると解釈され、箱庭療法などの心理治療が行われた。同時に両親のカウンセリングが進められ、養育態度も改められ、熱心な担任の積極的な協力も得られて改善した。この事例を通して、氏は、大人との信頼関係や学校とのより良い連携が必要であることを訴える。また、昨今の子どもたちの人間関係の結び方の下手さをさまざまな角度から考察し、耐性の問題について論じる。そして、大人側の問題として、受け入れる態度の少なさを、学校側の問題として、フォローの体制がなかなか取れないことを指摘し、いじめが深刻化してしまう原因を探る。最後に、全体と個を生かす難しさを語り、個人を尊重しつつ調和を計っていききたいと述べる。

思いやりのある子どもを育てる指導

橋氏は、小学校にいる1担任の立場として小学校の傾向と教師の取り組みを話す。まず、フロアーの諸氏に2つの問題を投げかける。その1つは「今は秋です。教室に大変きれいな秋の七草が飾ってあります。教室に入って何かを感じましたか」という問いである。秋の七草を学校に持って来た子どもは評価はオール1であり、学習

面からいえば大変問題であるが、人の気持ちをよく察することのできる豊かな心情をもって育ってきたと評価する。そして、そういった子どもを教師の側としては無視していないだろうかと強調する。社会のあり方も批判し、反省を求める。かつてのいじめと現在のいじめを比較し、氏の学校における傾向を紹介する。そこには学歴偏重の社会の一端をみるのである。次に、氏の小学校での実践が報告される。声かけから始まる朝、問題がみられたら職員全員で話し合うという対策などである。そして、集団一斉指導の中に個を入れた学習。これは、その子その子の発達段階に応じてその学習に意欲的に取り組ませようというものであり、仲間意識をもたせ、思いやりのある子どもを育てる指導である。氏は、一生懸命にやっても育たないもの—挨拶のできなさや集中力のなさなど—を挙げ、家庭における基本的なしつけが大きく関わっていると指摘する。そして、家庭教育でしなければならないことを学校教育が肩代わりをしてやっている面があることを述べ、教師の基本姿勢を語る。小学校の教師に課せられている問題の大きさを語りながら、家庭の協力を切に望み、大人たちがみているようでみていなかったことを指摘し、日頃の氏の子どもの観察ぶりが話された。

粗暴な攻撃性を昇華させる

山崎は、いじめに沈黙化の兆しが出ているという最近の報道を紹介した上で、改めて根深いものであることを再認識する必要性を強調する。臨床心理学の立場からいじめを考える。最初にその今日の特徴に触れながら、いじめの問題のかかえる深刻さをその陰湿な残忍さという面から捉える。そして、けんかとの差異も論じ、人々との関係をはぐくんでいくようなぶつかり合いとしての意味ももつ健全なけんかが冷酷ないじめと化してしまっていることを嘆く。次に、いじめの背景についての多くの識者・専門家の意見を紹介し、いじめ現象についての問題意識と教育的実践とが不可分であることを強調する。そして、いじめの深層心理について考察を加える。意識しないでの攻撃行動の満足感、劣等感、欲求不満耐性ないし抑止力のなさ、主体性の欠如、取り入れの機制などについて述べる。粗暴な攻撃性について論じ、攻撃性の制御機構の未発達という視点から説明する。次に、いじめの早期発見に関して、山崎らの作成した「いじめ発見の質問紙調査」について話し、この調査票の利用によって、担任教師が学級および児童・生徒の一人ひとりの実態を察知、把握し、その実態に基づいた指導計画が立てられればよいとする。最後にいじめの解決に向けて、3つのことを述べる。現代に生きる子どもたちの心の奥

深くに内在している残酷さや激しい攻撃性の昇華が教えられる必要性、責任をもって他人と接する訓練をしなければならないこと、いじめの解決には大人のリードや支えが必要不可欠であるということが挙げられた。

以上、5氏の発表の後、フロアーの方々から熱心な質問や意見が出された。親の指導の難しさはさる事ながら、

いじめの解決には長期的な多くの人々の努力が要ることが再確認された。いじめをなくそうという熱い思いが会場にあふれ、具体的な対策が強く望まれた。今、自分にとってできることは何かということを常に念頭に置き、いじめの問題に取り組んでいきたいものである。
